

博士論文要約

崎山多美研究—「私」と「他者」の物語—

広島大学大学院 教育学研究科
文化教育開発専攻 国語文化教育学分野 博士課程後期

D141739 渕上千香子

論文構成

序章

- 第一節 問題意識
- 第二節 研究の着眼点
- 第三節 先行研究と本研究の姿勢
- 第四節 論文構成

第一部「私」を語ること

第一章 「島」と「私」の距離—「水上往還」—

- 第一節 場所から人へ
- 第二節 結び得ない像
- 第三節 遠ざかる場所
- 第四節 場所の喪失と人との繋がり

第二章 「わたし」の語り—「くりかえしがえし」—

- 第一節 「わたし」が語ること—「島」から「シマ」へ—
- 第二節 「神話」を語り直すこと
- 第三節 音と声の再生をめぐって
- 第四節 物語の起点へ

第三章 虚構の「わたし」—「水上揺籃」—

- 第一節 舞台装置としての「シマ」
- 第二節 Yと「わたし」
- 第三節 「わたし」の物語を演じること
- 第四節 虚構を生きること

第二部 「他者」を語ること

第四章 「他者」からの呼びかけ

—「オキナワンイナグングァヌ・パナス」「ゆらていく ゆりていく」「ホタラ^{バナス}綺譚余滴」—

- 第一節 呼びかけの痕跡と「シマコトバ」
- 第二節 「日本語」から零れ落ちる声
- 第三節 「しまくとうば」から零れ落ちる声
- 第四節 語り手の位置
- 第五節 「私」の立場

第五章 「他者」と出会い直すこと―「アコウクロウ幻視行」「マピローマの月に立つ影は」―

- 第一節 「マチ」の「他者」からの要請
- 第二節 物語を欲望すること
- 第三節 欲望を問い直すこと
- 第四節 「私」の立場の検討

第六章 「他者」の声を語る「コトバ」―「クジャ奇想曲変奏」―

- 第一節 声を取り巻く場
- 第二節 記憶を証言すること
- 第三節 声の多様性
- 第四節 「コトバ」の喪失と獲得
- 第五節 「コトバ」の空白、空白の「コトバ」

第三部 「他者」を語る「私」を語ること

第七章 「他者」の声の表象化をめぐる―「月や、あらん」―

- 第一節 声を喪った存在を「書きつづける」「わたし」
- 第二節 書くポジショナリティー（1）高見沢了子
- 第三節 書くポジショナリティー（2）「わたし」
- 第四節 「コトバ」を用いる「わたし」
- 第五節 戸外へ出た「わたし」と死者たちの出会い

第八章 書く登場人物「わたし」―「うんじゅが、ナサキ」「ガジマル樹の下に」―

- 第一節 「記録」をめぐる「タビ」
- 第二節 「わたし」の痕跡
- 第三節 「パクリ」の指摘
- 第四節 物語と物語の接続
- 第五節 再び語り手の「わたし」へ

第九章 「イマ」の「わたし」の語り―「Qムラ前線 a」「Qムラ前線 b」「Qムラ陥落」―

- 第一節 「Qムラ」の危機
- 第二節 危機を語る「コトバ」の「クンレン」
- 第三節 「やって来ないトキ」のために
- 第四節 不断の出会い直しから生まれる「コトバ」

補論 崎山多美の近作について

第一節 「コトバ」を生み出すことにおいて存在する「私」

— 「崖上での再会」及び単行本『うんじゅが、ナサキ』—

第二節 「未来」への「責任」と「祈り」

結章

第一節 崎山の物語行為について

— 「コトバ」を書くことにおいて見出される「私」と「他者」の関係性—

第二節 「名づけ」との向きあい方—「女」を例として—

第三節 課題と今後の展望

参考引用文献

謝辞

1. 問題意識

沖縄県西表島出身の作家・崎山多美は、「私」にこだわる作家である。そのことは、自身の創作活動について述べたエッセイ「たくらみ—いざ、たくらまん」における「私」は「沖縄」ではないし、「沖縄」も「私」ではない、「私は「私」のことを書きたいといつも思う」¹という言葉や、エッセイ「「他者」の名前」における次のような言葉などからうかがえる。

私などは、相手からウチナーンチュのイナグであると認知されたと感じた時、ある虚脱の状態に陥る。まるで自分が透明人間になってしまったような。そんな時だ、「私」とは何なのだ、と言わずもがなの問いを思わず発してしまうことになるのは。²

「私」を書きたいと述べる崎山にとって、「ウチナーンチュ（沖縄人）」や「イナグ（女）」は、「私」をカテゴリー化し「透明」化する名づけである。「沖縄人の女」としてしか理解されない「私」をどのように語ることができるのか、それは崎山の格闘してきた文学的課題であると言えよう。このような「私」を語る困難は、他の誰かと関わる際の困難にも通じると崎山は言う。「「他者」の名前」では、岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か』（二〇〇〇年、青土社）の冒頭に書かれた岡の経験について言及しながら、「他者」と「私」の関係性についての検討がなされている。旅のアクシデントから、見知らぬパレスチナ人の女性と「私」（岡）は一晚を共に過ごす。しかし、女性の身の上話を聞く機会を「私」は逃し、「本当の彼女」を知ることができなくなる。それは「出会った」のにもかかわらず「出会う」ことができなかった「出会い損ね」の経験である。崎山は二人の女性の「呼ばれ方」こそが「出会い損ね」を引き起こし、「関係性の困難」を浮きぼりにするという。「その日会ったばかりの旅人の私を、エルサレムに住むその女性は親しみをこめ「マリ」と固有名で呼びかける」のに対し、「私」の方は「彼女自身がみずからを「私たちパレスチナ人」と名づけたままに、旅の記憶から甦った彼女を「パレスチナ人の女性」とだけ記すほかはなかった」³。このような「関係性の困難」を引き起こす要因こそを崎山は「名づけの方法」に見出す。

しかし、私たちは、巨大にグローバル化されつつあるこの時代に、本当の意味において、実体ある他者（異文化）に向けて呼びかけ交渉することが可能なのだろうか。あるいは「本当」の自分を相手に伝える言葉をもつことが。未曾有のテロ事件に震撼させられ、国家正義の名のもとにふるわれる大国の権力行使に、言葉を失う世界の現実を見せつけられているから、というだけではない。私個人の足許の問題として、このことを考える必要を、今私は強く感じている。

例えば、私たちは日常的に、自分を、相手を、何げなく「ウチナーンチュ」だ、「ヤマトウンチュ」だ、といい、「ミヤクーンチュ（宮古人）」「エーマンチュ（八重山人）」「アマミー（奄美の人）」「アメリカー」「フィリピナー」「タイワナー」というふうに呼び分け、呼びならわす。状況によっては肯定的にも否定的にもそれらは使い分けられる。しかし、その、土地の名や国家の名と深く結びついた、人の存在証明たる名前の分類には、その名づけの方法自体に、すでに言説的暴力

¹ 崎山多美「1 たくらみ—いざ、たくらまん」（崎山多美『コトバの生まれる場所』二〇〇四年二月 砂子屋書房 八頁）

² 崎山多美「9 「他者」の名前」（崎山多美『コトバの生まれる場所』二〇〇四年二月 砂子屋書房 九五頁）

³ 崎山多美「9 「他者」の名前」（崎山多美『コトバの生まれる場所』二〇〇四年二月 砂子屋書房 九三頁）

が働いていることに気づかれなければならない、と思うのだ。取り替えのきかぬかけがえのない個人を「何々人」と括ることによって、人としての存在の不透明さを抹消してしまっている、ということに。

肯定的にであれ否定的にであれ、人と人とを分割し住み分けを強制する名づけの方法に潜む、差別と排除の方法に敏感になること。制度の不可侵の名前を取り戻すこと。そのことが、この時代において人と人とが向かい合うことを可能にする大切な方法なのかもしれない。⁴

「名づけの方法」には「言説的暴力」が働き、「取り替えのきかぬかけがえのない個人」の「存在の不透明さを抹消」してしまう。こうした「言説的暴力」は、「土地の名や国家の名」だけに限らず、崎山が述べるように「女」などという「名づけ」に対しても働いてしまう。崎山の思索や創作は「抹消」された「個人」の「不透明さ」を取り戻すものであると言えよう。それが、「本当の意味において」「他者」と交渉し、「本当」の自分を語ることであろう。

崎山が小説に書こうとしているのは、「本当」の「私」の声や、「私」ならざる「他者」の声、そしてそれらの「関係性」なのではないか。そこには「他者」に対してどのように接することができるのかという「私」の立ち位置の探求が試みられているのではないか。崎山の述べる「この時代」よりもいっそう、現在では「他者」に対する差別と排除のまなざしが強まっている。その差別と排除は「表現の自由」を盾にしながら、「他者」をカテゴリー化し、暴力的にイメージを付与し、名付け、自らとは異質な者として切り離す⁵。崎山の小説を読むことは、分断された状況を問い直し「人と人とが向かい合う」ための視座を得る行為であると言える。本研究は崎山の書いた小説全般を視野に入れ、崎山多美の作品において「私」と「他者」、およびその関係がどのように語られているのかを明らかにする。

2. 研究の着眼点

具体的な研究の着眼点について、崎山の「沖繩」という「名づけ」への向かい合い方を整理しつつ述べる。

「私」は「沖繩」ではないし、「沖繩」も「私」ではない」と述べるのにも関わらず、崎山の作品には「南島」「オキナワ」などと「沖繩」の事例が多く用いられている。「沖繩」という鋳型と「私」を結びつけられたくないのであれば、作品にまったく「沖繩」のことを登場させない「私」の物語を書くことも考えられるはずである。崎山が「沖繩」として括られることに対して非常に敏感で、それに否定的であるにも関わらず、「沖繩」の事例を書くのはなぜなのか。その理由は、崎山の続く言葉からうかがえる。「書いていくうちに意に反して「沖繩」の中の私でしかない「私」として書くことになるのかもしれない。ミゾはミゾとして深くあるにしても。」と崎山は言う。「私」を書こうとする際に、「沖繩」の介入はどうしても免れないことを自覚しているのである。では崎山は、どのように「私」を書くのか。崎山は以下のようにも述べている。

⁴ 崎山多美「9 「他者」の名前」（崎山多美『コトバの生まれる場所』二〇〇四年二月 砂子屋書房 九四―九五頁）

⁵ 例えば内藤千珠子は『愛国的無関心―「見えない他者」と物語の暴力』（二〇一五年一〇月三〇日 新曜社）において、現在に蔓延する「愛国的メンタリティ」を支えるのが「敵として記号化された他者への無関心」（二九頁）であると指摘する。内藤は愛国言説に同調する物語の暴力のメカニズムを明らかにし、「伏字的死角」へと追いやられ不可視化された「他者」の存在を文学作品から浮かび上がらせていく。崎山の「私」と「他者」の関係こそを問う小説は、このような現在の状況の変革のためにも解読することが肝要であろう。

ところで、このふたつのもの間にあるミゾというのは、埋めることのできない裂け目という意味でもあるけれど、じつは、それこそが、書くことの「たくらみ」を注ぎこむことを可能ならしめる想像の場、でもあると私は思うのだ。⁶

「沖縄」と「私」との間にあるミゾをあえて描き出す試み。こうした崎山の「沖縄」という「名づけ」への向き合い方を理解するために、崎山とインドの批評家G・C・スピヴァクが類似しているという先行研究、花田俊典の指摘⁷に目を向けたい。「私」の言説が、「沖縄」「インド」を「代表——表象(represent)」するとみなされることに疑念を抱いている点で、崎山とスピヴァクは似ている、と花田は述べる。スピヴァクが用いる、「戦略的本質主義」は「女」や「民族」といった「本質」を、いったん「戦略」として設定し、その立場に立ってみる行為である。スピヴァクは、「普遍的言説」、「本質的言説」を、「戦略的に」利用することについて述べる。「女ならば……べきである」「同性愛者ならば……べきである」といった言説を一旦用い、その言説をずらし、裏切り、そこに自らの固有性、個別性といったものを描き出していくのが、スピヴァクの方法である。これに類似するものとして、「沖縄」の要素を用いつつ、そこから距離を取るという崎山の方法をうかがうことができるだろう。つまり崎山は「戦略」として「沖縄」の事例を用いるのである。「たくらみ」を注ぎこむという先の発言は「沖縄」と「私」の、「ミゾ」は埋められなくとも切り離すこともできないという拮抗関係を書くことであるとも言い換えられる。崎山の「たくらみ」とは、文章を書くことによりこの拮抗関係を浮かび上がらせることである。

花田の指摘を踏まえると、崎山の試みとは、「沖縄」や「女」などの物語に抗いながら言葉を綴ることであり、既存の物語と向き合っ、その拮抗関係において別の物語を書くことであろう。本研究では、この崎山の物語を書く行為そのものに着目する。「私」と「他者」について語ろうとする時、崎山が具体的にどのような「たくらみ」を持って、どのような物語と向き合いながら、どのような物語を書いているのかを、作品に沿って明らかにしたい。

3. 先行研究と本研究の姿勢

二〇〇〇年頃まで、崎山多美への注目は少なく、「沖縄文学」の中の一試みとして岡本恵徳が言及している⁸程度に留まっていた。花田俊典の論考は、従来の「沖縄文学」と崎山多美の距離を指摘するとともに、その観点から崎山多美論を初めて構築しようとした試みであると言える。この成果の上に、崎山多美の作品論は活発になった。個別の作品論については、黒澤亜里子⁹、新城郁夫¹⁰、渡邊英理¹¹などがすぐ

⁶ 崎山多美「1 たくらみ いざ、たくらまん」(崎山多美『コトバの生まれる場所』九頁。)

⁷ 花田は次のように述べている。「私」は「沖縄」ではないし、「沖縄」も「私」ではない。けれども、「沖縄」に生まれ育ち暮らしている以上、「『沖縄』の中の『私』でしかない私」として書かざるをえない局面もある、——崎山多美はこう述べている。こういう崎山多美のスタンスは、したがってスピヴァクにおけるインドの位相に似ている。」花田俊典「自画像と他画像の問題(三) —沖縄現代文学とオリエンタリズム—」(花田俊典『沖縄はゴジラか——〈反〉・オリエンタリズム／南島／ヤポネシア——』二〇〇六年五月 花書院 六六頁。)

⁸ 岡本恵徳「主題としての『シマ』——崎山多美の世界」(崎山多美『くりかえしがえし』 付録 一九九四年五月二〇日 砂子屋書房)／岡本恵徳「VI沖縄の基層 崎山多美『水上往還』」(岡本恵徳『現代文学にみる沖縄の自画像』一九九六年〇六月二日 高文研)

⁹ 黒澤亜里子「崎山多美の「ゆらていく ゆりていく」を〈ゆんたくひんたく〉読む」(『ユリイカ』二〇〇一年八月号)

¹⁰ 新城郁夫「第二章 言語的葛藤としての沖縄」(新城郁夫『沖縄文学という企て 葛藤する言語・身体・記憶』二〇〇三年一〇月 インパクト出版会)

¹¹ 渡邊英理「夢の言葉の現実性——崎山多美「孤島夢ドュチュイムニ」」(一柳廣孝、吉田司雄編著『幻想文学 近代の魔界へ』二〇〇六

れた論を展開している¹²。これらの論に加えて、関連する作品との差異や連続性についての視点が必要である。作品を横断しながら崎山多美の物語行為について言及している喜納育江¹³、仲里効¹⁴、丸川哲史¹⁵などの論考もあるが、いずれも作品分析という点では概略的であり、細かく作品に沿って論を精緻化していくことが必要である。本研究は詳細な個別の作品論を展開しながら、崎山の物語行為全体を明らかにした。

また、先行研究では崎山を「沖縄文学」自体を問い返す存在としながらも、あくまでもそのような試みを行う「現代沖縄文学作家」として崎山を捉えているものが多い¹⁶。例えば松下優一は「沖縄文学」を「代表」する作家、大城立裕と並列する形で崎山多美の作品を論じており¹⁷、直近では浦田義和が「現代沖縄文学」の動向について、崎山多美の創作活動を概観することにより総括している¹⁸。本研究では、崎山が創作を行う際に向き合う「沖縄文学」や「沖縄」表象、「沖縄」の物語等について言及するものの、「現代沖縄文学作家」としての崎山多美論を掲げず、崎山の物語行為それ自体に主眼を置いた。

4. 各部・各章の概要

本論文は「第一部 「私」を語ること」「第二部 「他者」を語ること」「第三部 「他者」を語る「私」を語ること」の三部構成からなる。第一部において、崎山の「私」を書く試みを追った。第二部においては「他者」についてどのように語るのかについて、その不可能性と向き合う「私」の立場の取り方の模索について考察を加えた。第三部においては、第二部で浮上した「他者」を語ることの不可能性を踏まえながら、どのように「私」が「他者」について語るができるのか、その模索自体を語る崎山の試みについて検討した。補論を付し、本論文で扱うことができなかつた近作について、検討を加えた。結章では、論文全体のまとめを行い、補遺とした。

第一部では、崎山の「私」を書く試みを追った。崎山の創作の出発点は、「自己表現のつまずき」をきっかけとした「私」を語ろうとするものであった。「島」を書こうとする試みは、「私」を支えるものは「島」にある、という考えが前提にあった。だがその前提は、実際に「島」を書いてみることによって

年五月 青弓社) / 渡邊英理「死者の記憶、記憶の死者—崎山多美「見えないマチからジョンカネーが」『社会文学』四〇号 二〇一四年七月。

¹²近年では個別の作品論として翁長志保子「崎山多美「孤島夢ドゥチュイムニ」論：了解不可能な「他者」と変容される身体」(『琉球アジア社会文化研究』(一七) 二〇一四年一月) / 翁長志保子「崎山多美「クジャ奇想曲変奏」論—共同体の構築と「解体」—」(『沖縄工業高等専門学校紀要』(九) 二〇一五年三月) も展開されている。

¹³ 喜納育江「淵の他者を聴くことば—崎山多美のクジャ連作小説における記憶と交感」二〇〇八年六月 / 喜納育江「第六章：淵を居場所とする者たちへ—崎山多美のクジャ連作小説における記憶と交感」(喜納育江『「故郷」のトポロジー：場所と居場所の環境文学論』二〇一一年七月 水声社)

¹⁴ 仲里効「II 小説のゾーン3 夢みるパナリ、パナスの旅—崎山多美のイナグ」(仲里効『悲しき重言語帯 沖縄・交差する植民地主義』二〇一二年五月二五日 未来社)

¹⁵ 丸川哲史「死者に触れる技法 目取真俊一九九七『水滴』、一九九九『魂込め』、崎山多美一九九九『マイアニ由来記』」(丸川哲史『帝国の亡霊 日本文学の精神地図』二〇〇四年一月 青土社)

¹⁶ 新城郁夫、仲里効、黒澤亜里子、丸川哲史の研究がこれに該当すると考えている。

¹⁷ 松下優一『「沖縄文学」の社会学—大城立裕と崎山多美の文学的企てを中心に—』二〇一五年三月 慶應義塾大学大学院社会学研究科(学位論文)

¹⁸ 浦田義和「「沖縄」現代小説の挑戦—崎山多美小説の「共同体テーマ」と「言語表現」」(日本社会文学会編『社会文学の三〇年 パブル経済 冷戦崩壊 三・一一』二〇一六年八月一五日 葺柿堂) 浦田の論考の主眼は崎山の「共同体破壊」の試みであり、また、このような論考が出ることは崎山多美への関心が高まっていることの表れと言える。一方で、このことは再び崎山が「沖縄の作家」という類型に入れられつつあるということを示しているとも考えられる。

裏切られた。第一章で扱った「水上往還」において「私」の根拠は場所としての「島」にはなく、唯一記憶に残っている祖母との、つまり人との関わりにおいて示された。その関わりは、音や波間に放たれた祖母の位牌のように、固定化されないものとして「私」の中で生きるのだった。

第二章で分析した「くりかえしがえし」において、「島」の喪失は「島」のことを、書くことによって見出していこうとする試みへと転移していく。その時、「島」は「シマ」となり、「私」は「わたし」として語り手となる。「わたし」は「シマ」を「くりかえしがえし」語り直しながら、人との繋がりを示す音と声を語り直す。「わたし」の姿勢には「私」の根拠を何度失ったとしても、書き直していこうとする意志があふれている。その意志によって、「私」は人との繋がりを示す音や声と、それらを何度喪つても出会い直すことが可能になるのだ。

第三章で扱った「水上揺籃」における「わたし」の振り舞いは、複数の物語の中に生きる存在を、また虚構の中に生きる存在を示している。こうした登場人物「わたし」によって示されるのは、「シマ」という舞台が様々な「他者」の演出のもとにあるということ、そしてその中で演技をする「わたし」という虚構の中にこそ、「私」が生きているということである。

第二部においては、「他者」を語る崎山の試みについて論じた。「私」を語ることの中には、「私」ならざる「他者」との繋がりが見出される。では、どのように「他者」の言葉を書くことができるのか。第四章では「日本語」と「しまくとうば」から放り出された「他者」の言葉を記す「シマコトバ」の試みを明らかにした。「オキナワインナグングァヌ・パナス」における「シマコトバ」は、「日本語」によって伝達しえない空白を示し、「日本語」で書かれた「沖縄の女の話」を語り直す。「ゆらていく ゆりていく」「ホタラ綺譚余滴」では、「しまくとうば」で行われる共同体内の語りにおいて排除される声を「コトバ」にする試みが見られた。メタ的な語り手を設定することによって、「コトバ」が固定化されていく過程や「他者」の声が排除されていくさまを語るができるのだ。

「他者」について語れば語るほど、「私」の立ち位置が問題となる。この問題を、続く第五章では作品に沿って検討した。「他者」についての物語を欲望している自らを自覚し、それゆえに語るができなくなっている「アコウクロウ幻視行」の「わたし」の姿に見られるように、「他者」とその声を語ろうとする時、立場を取りかねる「私」が書かれていた。「マピローマの月に立つ影は」において、欲望を作り替えながら、「他者」ともう一度出会い直そうとする試みが書かれていた。「マチ」を書いた他の短編に見られるように、異なった立場の語り手に「私」をいったん投影させてみることによって、「他者」と関わる「私」の立場を見つけ出そうとしたのだ。

その模索の先には、「他者」の声を「コトバ」にしようとする試みがある。第六章「クジャ奇想曲変奏」においては、「にほんご」を話す「オレ」に「私」を投じ、「他者」と関わりながらその声を「日本語の言説空間」における「コトバ」にしようとするものであったと言える。それは「にほんご」の空白として示された。だがその空白は果たして「コトバ」としてどの程度読み取られるのだろうか。空白の「コトバ」は、ともすればただの空白として消去されてしまうのではないか。そうした問題は、開かれた問いとして残っているとと言える。

第三部では、第二部の問いを引き受ける形で崎山の近年の作品分析を行った。「コトバ」として聴き取られない声をどのように「コトバ」にできるのか。声を喪つた者の声を表象するため、第七章で扱った

「月や、あらん」における語り手「わたし」は、声を喪った者の声を聴こうとするその人について語ろうとする。それは、呼びかけにただ応答し、その応答を「コトバ」で「書きつつづける」といった、往還行為であった。声を定まった「コトバ」として表象するのではなく、「コトバ」の表象不可能性を意識しながら、声を表象化していくその過程を「書きつつづける」ことによって、その声と向き合おうとしたのである。これは、語り手「わたし」を設定することによって「他者」との関係を見出していく「私」の立場からの語りと「コトバ」の生成過程を描き出すメタ的な語りとの両面を用いた語りの方法である。「他者」と向き合って「コトバ」を生み出そうと奔走する「私」そのものについて語ることで、「私」と「他者」の関係性が「コトバ」によって示される。

「他者」の記憶と体験が記された「記録」に導かれるようにして、「わたし」は「タビ」に出る。第八章で扱った「うんじゅが、ナサキ」「ガジマル樹の下に」における「わたし」は「記録」に書かれた「他者」の体験に向きあおうと、その体験を綴り直している。「他者」の「コトバ」の中に「わたし」の痕跡を示し、「パクリ」を指摘することで「コトバ」が誰から誰に受け渡されたのかを明らかにし、「他者」の「コトバ」と自らの「コトバ」を結びつける。その繋ぎ目に、「私」の存在は浮かび上がる。

そして第九章で扱った「Qムラ」三部作と補論で扱った近作において、崎山の「コトバ」は、危機的状況を語るためのものとなる。「コトバ」が持つ危険性と必要性をその身に染みこませながら、「わたし」は「コトバ」の「クンレン」を行う。危機的状況を打破し、「未来」へ向かうための「コトバ」とは、「わたしではなかった」かもしれない者の「コトバ」を自らのものとして「わたし」が発するという、「私」と「他者」の繋がりを示すものでなければならない。その「コトバ」を発する局面において、「私」は存在するのだ。

5. 研究の総括と今後の展望

本論文を通して、崎山多美の「私」と「他者」、およびその関係性について語る試みを追ってきた。まず、論文全体のまとめとして、この崎山の物語行為がどのようなものであったのかについて述べる。

崎山の物語行為は、書くことそのものによって「私」と「他者」、そしてその関係性を見つけ出そうとする過程であった。「私」とは何者なのか、それを知ろうとして「私」のことを書き始めたところ、「私」を作る「他者」からの呼びかけが聴こえてくる。「私」を書くためにはその呼びかけを記す必要があるので、やってみようとするれば、「他者」に対する「私」の立場が分からなくなる。しかし、ここで崎山は書くことをやめない。「他者」からの呼びかけに応じ、言われるままに動き、時に「他者」からの糾弾を書き込みながら奔走する「私」の姿を書く。そうすることで見過ごしてきた「他者」の存在に目を向け、幾度も出会い直し、関係を問い直す。そして「他者」から「コトバ」を得て、その「コトバ」を綴り直し、「他者」と共に「コトバ」を生み出す。このような過程を全て「コトバ」として書いていくことにおいてのみ、書く「私」が存在するのだ。崎山は物語行為を通して、「コトバ」が「私」と「他者」の繋がりそのものであることを示し、書く行為そのものに、「私」と「他者」の関係性が構築しうることを示している。

次に、先行研究において指摘されていた崎山の「名づけ」との向きあい方について述べる。作品全体を通して繰り返し話題とされていた「女」という「名づけ」と崎山がどのように向き合おうとしたのかという観点で本論文の内容をまとめると、大きく分けて二つの試みが明らかになった。霸権的な言説空間である「男」の物語に「女」の声を響かせることと、「同じ女」を前提とせず、「女」と名づけられたことを出発点として、「私」と「他者」の繋がりや異なりを見出していくことである。こうした崎山の「名づけ」との向きあい方をまとめてみると、「戦略的本質主義」を用いることで「他者」に対する「私」の立場を仮構しながら、「本質」とのずれを生み出し、霸権的な言説空間に訴えたスピヴァクのスタンスと、確かに似通っている。ジェンダーや民族、階級などが入り交じった中における固有の「他者」の声を聴き取ろうとする時、発言者の立ち位置は常に問題とされなければならない。スピヴァクも崎山も、そのことを常に自覚している。

しかし、崎山がこの立ち位置を、書くことにおいて引き受け、「コトバ」を生み出す過程の中に見出そうとしていることは、異なりとして指摘できる。崎山は書くことによって、「名づけ」によって奪われた、声なき「他者」の声を「コトバ」にしようとする。書くことにおいて見過ごしてきた「他者」と出会い直し、彼らとの共同の作業として「コトバ」を紡ぐ。さらには、その過程すらも「コトバ」として書く。「他者」に対して、その声を「コトバ」にする行為の中においてのみ、書く「私」が存在すると言わんばかりである。スピヴァクが「女」といった「名づけ」を取って設定し、名乗ることによって、その「名づけ」と「他者」とのずれを暴いていくのだとすれば、崎山は「他者」の声を聴き取ろうとし、「コトバ」にしようとする「私」の様態を書くことによって、「私」と「他者」の関係性そのものを「コトバ」にしていくのだ。

最後に、本論文の課題と、今後の研究の展望を述べる。本論文においては、崎山多美の小説作品全般に言及しながら、「私」と「他者」、及びその関係性がどのように書かれているのかを追ってきた。しかし、全ての作品について十分な検討ができなかったことは、重要な課題である。また、本論文は崎山のエッセイの「コトバ」を出発点とし、作品分析においても適宜崎山自身の「コトバ」を参照したが、小説自体の「コトバ」の分析に主眼を置いたため、直接的には崎山のエッセイ等の「コトバ」を引用しなかった部分も多い。しかし、エッセイ等における崎山の「コトバ」と対照しながら小説を解読することによって、「小説を」書くことにおける、つまり創作活動することにおける崎山の試みを探ることができたのではないと思われる。このことについては崎山多美のテキスト全般を視野に入れ、検討する必要がある。

参考引用文献一覧

◆崎山多美著作

「街の日に」『新沖縄文学』一九七九年八月号

『くりかえしがえし』一九九四年五月 砂子屋書房

『南島小景』一九九六年一〇月 砂子屋書房

「風水譚」『へるめす』一九九七年一月号
『ムイアニ由来記』一九九九年一月 砂子屋書房
「シマコトバ」でカチャーシー」(今福龍太編『「私」の探求(二一世紀文学の創造 二)』二〇〇二年一二月 岩波書店)
『ゆらていく ゆりていく』二〇〇三年二月 講談社
『コトバの生まれる場所』二〇〇四年二月 砂子屋書房
「水上揺籃」『群像』二〇〇一年八月号
「孤島夢ドゥチュイムニ」『すばる』二〇〇六年一月号
「見えないマチからションカネーが」『すばる』二〇〇六年五月号
「アコウクロウ幻視行」『すばる』二〇〇六年九月号
「ピンギヒラ坂夜行」『すばる』二〇〇七年一月号
「ヒグル風ヌ吹きば」『すばる』二〇〇七年五月号
「マピローマの月に立つ影は」『すばる』二〇〇七年十一月号
「クジャ奇想曲変奏」『すばる』二〇〇八年三月号
『月や、あらん』二〇一二年九月二六日 なんよう文庫
「うんじゅが、ナサキ」『すばる』二〇一二年一二月号
「ガジマル樹の下に」『すばる』二〇一三年一〇月号
「Qムラ前線a」『すばる』二〇一四年五月号
「Qムラ前線b」『すばる』二〇一四年九月号
「Qムラ陥落」『すばる』二〇一五年六月号
「キユぬピイば」『越境広場』第一号 二〇一五年一二月
「崖上での再会」『すばる』二〇一六年一月号
「シマコトバでカチャーシー」二〇一六年一月 『立教大学日本文学』第一一五号
『うんじゅが、ナサキ』二〇一六年十一月 花書院

◆参考引用文献(書籍)

石田雄『記憶と忘却の政治学 同化政策・戦争責任・集合的記憶』二〇〇〇年六月 明石書店
池内紀・若林恵著『カフカ事典』二〇〇三年六月三〇日 三省堂
伊豫谷登士翁・平田由美編『「帰郷」の物語／「移動」の語り 戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』二〇一四年一月 平凡社
岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か 第三世界フェミニズムの思想』二〇〇〇年九月一八日 青土社
岡真理『アラブ、祈りとしての文学』二〇〇八年一二月 みすず書房
岡本恵徳『現代文学にみる沖縄の自画像』一九九六年〇六月二一日 高文研
沖縄文学フォーラム実行委員会『沖縄文学フォーラム 沖縄・土着から普遍へ—多文化主義の表現の可能性— 報告書』一九九七年三月二五日(フォーラム自体は一九九六年一二月一五日、一六日)
鹿野政直『鹿野政直思想史論集 第三巻』二〇〇八年一月八日 岩波書店

- 鹿野政直『鹿野政直思想史論集 第四巻』二〇〇八年二月六日 岩波書店
- 鹿野政直『沖縄の戦後思想を考える』二〇一一年九月二二日 岩波書店
- 川村湊編『現代沖縄文学作品選』二〇一一年七月九日 講談社文芸文庫
- フランツ・カフカ著、池内紀訳『変身ほか カフカ全集四』二〇〇一年六月 白水社
- 喜納育江編著『沖縄ジェンダー学1 「伝統」へのアプローチ』二〇一四年三月 大月書店
- 財団法人沖縄県文化振興会史料編『沖縄県史（各論編五）近代』二〇一一年四月二一日 編集工房東洋企画
- 酒井直樹『日本思想という問題 翻訳と主体』一九九七年三月一四日 岩波書店
- 酒井直樹『日本／映像／米国 共感の共同体と帝國的国民主義』二〇〇七年七月二日 青土社
- 島袋盛敏、翁長俊郎著『標音評釈 琉歌全集』一九六八年二月二〇日 武蔵野書院
- 新城郁夫『沖縄文学という企て 葛藤する言語・身体・記憶』二〇〇三年一〇月二五日 インパクト出版会
- 新城郁夫『到来する沖縄 沖縄表象批判論』二〇〇七年一月一五日 インパクト出版会
- G・Cスピヴァク著、上村忠男訳『サルタンは語るができるか』一九九八年一二月 みすず書房
- ジャック・デリダ著、守中高明訳『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』二〇〇一年五月一八日 岩波書店
- ジョン・W・トリート 著、水島裕雅・成定薫・野坂昭雄 監訳『グラウンド・ゼロを書く 日本文学と原爆』二〇一〇年七月七日 法政大学出版局
- 仲里効『悲しき垂言語帯 沖縄・交差する植民地主義』二〇一二年五月二五日 未来社
- 仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』一九八〇年六月一〇日 角川書店
- 仲程昌徳『「ひめゆり」たちの声—『手記』と「日記」を読み解く』二〇一二年六月 出版舎 Mugen
- 花田俊典『沖縄はゴジラか—<反>・オリエンタリズム／南島／ヤポネシア—』二〇〇六年五月一五日 花書院
- 花田俊典『清新な光景の軌跡—西日本戦後文学史— 補訂版』西日本新聞社二〇〇四年四月一三日
- 半田一郎編著『琉球語辞典』一九九九年一月三〇日 大学書林
- 平敷武蕉『南瞑の文学と思想「沖縄タイムス 文芸時評」2007～2011年』二〇一六年二月一八日 沖縄タイムス社
- W・ベンヤミン著、野村修ほか訳『新しい天使』一九七九年八月 晶文社
- 松下優一『〈沖縄文学〉の社会学—大城立裕と崎山多美の文学的企てを中心に—』二〇一五年三月 慶應義塾大学大学院社会学研究科
- 丸川哲史『帝国の亡霊 日本文学の精神地図』二〇〇四年一月二〇日 青土社
- 屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす—記憶をいかに継承するか』二〇〇九年十一月 世織書房
- 琉球新報社編『新版 沖縄コンパクト事典』二〇〇三年三月三一日

◆参考引用文献（論文、書評）

- 浦田義和「「沖縄」現代小説の挑戦——崎山多美小説の「共同体テーマ」と「言語表現」」日本社会文学会編『社会文学の三〇年 バブル経済 冷戦崩壊 三・一一』二〇一六年八月一五日 菁柿堂

大城立裕「「命どう宝」異聞／クリントン演説に疑問」『琉球新報』二〇〇〇年七月二三日掲載

岡本恵徳「主題としての“シマ”——崎山多美の世界」(崎山多美『くりかえしがえし』 付録 一九九四年五月二〇日 砂子屋書房)

岡本恵徳「崎山多美の宣言」『沖縄タイムス』二〇〇三年三月二日

翁長志保子「崎山多美「孤島夢ドゥチュイムニ」論：了解不可能な「他者」と変容される身体」『琉球アジア社会文化研究』(一七) 二〇一四年一月

翁長志保子「崎山多美「クジャ奇想曲変奏」論—共同体の構築と「解体」—」『沖縄工業高等専門学校紀要』(九) 二〇一五年三月

我部聖「「日本文学」の編成と抵抗—『琉大文学』における国民文学論」『言語情報科学 7』二〇〇九年

我部聖「体験の継承 難しさ表現／冗舌や吃音の語り 胸に迫る」『沖縄タイムス』二〇一五年五月三十一日

喜納育江「淵の他者を聴くことば——崎山多美のクジャ連作小説における記憶と交感」『水声通信』二〇〇八年六月／喜納育江「第六章：淵を居場所とする者たちへ——崎山多美のクジャ連作小説における記憶と交感」(喜納育江『「故郷」のトポロジー：場所と居場所の環境文学論』二〇一一年七月 水声社)

喜納育江「月であることと、月という名で呼ばれていることは別次元——沖縄をめぐる言説への軽妙だが痛烈な風刺も」『図書新聞』二〇一三年二月二三日掲載

喜納育江「崎山多美著「うんじゅが、ナサキ」夢幻の裏に苦しむ沖縄」『沖縄タイムス』二〇一六年一月一〇日掲載

黒澤亜里子「崎山多美の『ゆらていく ゆりていく』を〈ゆんたくひんたく〉読む 〈沖縄〉から—ことば、映像、記憶、その可能性—島の奥へ、辿る道」『ユリイカ』二〇〇一年八月号

越川 芳明「すばる文学カフェ ひと 崎山多美」『すばる』二〇〇五年一月号

佐喜真彩「「他者」を聞きとるといふこと 崎山多美における音の考察を通して」『言語社会 9』二〇一五年三月 一橋大学大学院言語社会研究科

鈴木次郎「現代沖縄への遠近法 崎山多美の小説世界の行方」『EDGE』第九・一〇合併号 二〇〇〇年三月

ポール・スミンキー「崎山多美の「水上往還」：不明瞭な境界に彷徨うアイデンティティ」『沖縄国際大学 外国語研究』第一四巻 第一号 二〇一〇年九月

玉城福子「沖縄戦の犠牲者をめぐる共感共苦の境界線——自治体史誌における「慰安婦」と「慰安所」の記述に着目して」『フォーラム現代社会学一〇』二〇一一年六月 関西社会学会

長谷川郁美「闇のなかに浮かぶシマ—崎山多美「くりかえしがえし」論」『絃説：文学批評』一五号 一九九七年八月

渊上千香子「崎山多美「月や、あらん」論——他者の声の表象化をめぐって——」『近代文学論集』第四〇号 二〇一五年二月

渊上千香子「「マチ」の声を語る「コトバ」——崎山多美「クジャ奇想曲変奏」論——」『社会文学』第四三号 二〇一六年二月

ヴィクトリア・ヤング「ディストピア的越境：崎山多美『ゆらていく ゆりていく』における「狭間」」『琉球・沖縄研究3』二〇一〇年

渡邊英理「夢の言葉の^{リアリティ}現実性——崎山多美「孤島夢ドゥチュイムニ」」（一柳廣孝、吉田司雄編著『幻想文学 近代の魔界へ』二〇〇六年五月 青弓社）

渡邊英理「『月や、あらん』 他なるものたちのほうへ」『琉球新報』二〇一三年二月一七日

渡邊英理「死者の記憶、記憶の死者——崎山多美「見えないマチからジョンカネーが」」（『社会文学』第四〇号、二〇一四年七月

「クリントン米大統領演説(全文)」『琉球新報』二〇〇〇年七月二三日